
ぼ~いず・びい・あんびしゃす

佐和月そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくはず・びい・あんびしやす

【Nコード】

N2491G

【作者名】

佐和月そら

【あらすじ】

ゴリスケ、ヤスヒコ、カンナ、リユータの小学生四人組が、夜の学校を冒険する物語。一話完結のショートストーリーです。

夜の学校はお化け屋敷よりもこわいや。

リユータがそう思うのは、真つ黒な廊下をこつそりこつそりと歩いているからである。

ちゃんと十品目食べた？とあやしげなテレビに惑わされて、テーブルに並べたお皿のおかずを数える母親と、リユータが腹痛をおこした料理でも文句を言わずに食べている寡黙な父親に、ちよつと友達のとこ行つてくると言つて家を出たのは、夜の七時半頃。どこ行くのと、手にした中皿から不気味な匂いをちらつかせている母親には、カンナちと嘘をついた。学年トップを走る秀才には、母親もガードがゆるいことを経験で知っているリユータである。案の定、早く帰つてきなさいよと言いながら、鼻につく匂いと共に台所へ消えた水玉模様のエプロン姿を見届けて、リユータは家のドアをそつと閉めた。

ことの発端は、今日の学校の帰り道で、「あつ！宿題忘れちゃったあ！」とヤスヒコが叫んだことにはじまる。校門を出てまもなくだったので、とつて帰ろうとしたのを、ゴリスケの手ががっしりと押さえつけて、「どうせなら夜に取りにいこーぜえ！」と熊のような目をきらきらと輝かせて言った。「オレ、夜の学校を探検してみたいんだ！」とガッツポーズをつけ加えて。すると肩を掴まれたヤスヒコは、チワワのような目をぱちくりさせながら、「えー……でもぼくう……」と尻込みをした。いつも栄養がいきわたっていないような顔をしているヤスヒコは、昼間お手洗いが停電になっただけで悲鳴をあげた実績がある。「なんだよー。いーだろー！」とのゴリスケに、いつもならこういう場合、「却下」と決めゼリフを吐くカンナが、どういうわけか細いメガネのフレームを押しあげて、「よし」と返事をしたものだから、その場でぶらぶらしていたリユータもあわせて、今夜八時、学校の校門前で集合ということになった。

ただいまその四人は、足音を忍ばせて、夜の廊下を歩いている真っ最中である。

先頭はゴリスケ。その次は、ヤスヒコ。三番目がカナナで、しんがりはリユータである。

ゴリスケはまるでアマゾンの奥深い秘境でも探検しているかのような意気込みで、いつ何時首狩り族が現れてもいいように、ギョロギョロと暗い廊下の壁を睨みながら、自慢の腕を振り回している。ちっとも怖くはないらしい。ヤスヒコはそのごつい背中に隠れるようにして歩いているが、ちよつとした物音にもビクビク反応して、「もう帰ろうよお」と泣き声で呟くのが癖になってしまっている。カナナは小さなペンライトを持っていて、それが唯一の明かりだ。学校に侵入してゴリスケが首からぶら下げている懐中電灯をつけようとしたのだが、目立つからとカナナが止めた。代わりにペンライトをつけているのだが、どう見ても持ち主にしかその恩恵にさずかっていない。カナナがひよいとよけても、後ろのリユータが壁にごつんとぶつかる。ちえつと舌打ちしながらも、お化け屋敷のたぐいが大好きなリユータは、やりかけのゲームや全然手をつけていない算数の宿題をきれいに忘れ、短パンのポケットに両手を入れてくつぷいていった。

ほどなく六年三組の教室にたどり着いた。もう目は暗闇に慣れていたので、ヤスヒコはそおっとドアを開けると、机にぶつからないように気をつけながら、窓側の席まで駆け足で行き、机の中から一枚の紙を取り出して、すばやく戻ってきた。

「あつた」

ヤスヒコの顔は安堵でいっぱいである。宿題を忘れずにすんだことよりも、この探検が終わることに一安心していることは、そのやつれたニコニコ顔で明らかだ。

ところがである。

「よつし。次は理科室だ」とゴリスケが意気揚々と宣言した。

まっさきにヤスヒコが悲鳴をあげる。

「えー、でもお……」

「なんだよ。あそこが一番のやまなんだぞ。なあ、カンナ」

「そうだね」と、ペンライトの明かりに照らされた顔が無情に頷く。リュータは二階にある理科室をぼんやりと思い浮かべた。ガラス棚に並べられた得体のしれない液体が入っているフラスコや、人体解剖の図が克明に描かれたポスター、不気味な標本、わけのわからない道具の数々、人間のおとなの骸骨の模型……

そこよりもわいわいと騒げそうな体育館のほうがずっと面白そうだと思った。けれどそれを見越したかのように、カンナがメガネの奥から鋭く見た。

「リュータ、夜にひとりで理科室へ行ったことをイソノさんが聞いたら、きつとすごいって言うてくれるよ」

イソノキリコさんはひそかにリュータが想っている同級生の女の子である。「なんだ、リュータ好きなのかよ」とゴリスケがからかい、ヤスヒコも「へえ」とびつくりして、リュータは頭をかいて照れたが、結局カンナも暇なんだなあと、ひとりじゃないけどねと突っ込みつつ、素直に従った。

三階にある六年三組の教室から理科室はそれほど遠くはない。ひとつ階段を下りて、廊下を左に曲がって進めば、目的地に到着する。ただし、そのゆく手には職員室が待ち構えている。

「いいか、ここがサイコーに難しいところなんだ。とにかく先生にみつかないように、気をつけて進めよ」

ドアのガラス越しに洩れている蛍光灯の明かりを指さして、ゴリスケ隊長はいざ突撃と頭を伏せた。

四人は透明のガラス部分を避けるために、忍者のようにここそこそと体を小さくして、ドアの前を通り過ぎようとした。けれどドアはほんの少し、親指ひとつぶんだけ開いていた。そこからはみ出した明かりとともに、複数の声がリュータの耳に入ってきた。

イソノキリコが、と聞こえた。

リュータはびたつと足をとめる。イソノさん？ドアのすき間に耳

を寄せた。「残念だなあ……」「……まだまだと思っていたんだけどねえ……」「……でもなあ、そんな素振りなかったのになあ……」話し声のひとつは、明らかに担任である。「……オオサカに行くって……」「あっちにいるんだらう……」「でもさあ、どうやって……」

リュータの心拍数がはねあがった。カナナが服の袖をひっぱっているが、胸がときどきしてそれどころではなかった。「……ほんとにびっくりだよねえ……」担任の声が少しだけ残念そうに聞こえる。リュータはくらくらと眩暈がしそうになった。頭の中が色々な言葉でごちゃ混ぜになっている。そういえば、今日のイソノさんは元気がなさそうだった。いいや、ここ最近、顔色が悪かった。風邪をひいたからって聞いたけど、それだけで元気がなくなるんだらうかおれなんて全然平気なのに。

もういてもたってもいらなかった。リュータ、と止める声を無視して、ドアをこじ開ける。

「せ、せんせい！イソノさん、転校しちゃうんですか！」

転がるようにして入ったリュータが目にしたのは、この春赴任したばかりの若き担任と、その担任と異様に仲が良くなったごっこつの体育教師がソファに向かい合って団らんしている光景。二人ともあっけに取られたようにリュータとその背後でうごめく三つの影を見たが、みるみる担任の表情が強張り真っ赤になった。

「お、お前たち！こんな時間に何をしているんだ！！」

こうして少年たちの探検は終わった。

その後四人は、担任の説教をくらい、さらに体育教師のカミナリをくらい、あげくにはそれぞれの保護者に電話させられ、家へ帰ってからもお小言をくらうという散々な目にあつた。

おまけにリュータは家へ戻る道すがら、ゴリスケの怒りの雄叫びと、ヤスヒコの呆れたため息と、カナナの冷たい眼差しにさらされ、短パンのポケットに両手をつ込み、肩を落としてとぼとぼと歩くし

かなかった。

けれど唯一の救いだったのは、イソノさんの転校話がリユータの勘違いだったことである。

若き担任と体育教師が話題にしていたのは、先ごろ結婚した同姓同名の某有名タレントのことだったのだ。なんでも担任が大ファンらしい。

よかった、と正直に思ったリユータである。

(後書き)

このお話、数年前に書いたものでして、その当時結婚されたタレントさんを才手に使ってしまった。好きな話のひとつなので、そのまま載せました。またこの少年たちの物語を書いてみたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2491g/>

ぼ~いず・びい・あんびしゃす

2010年10月8日15時21分発行